本日日新聞　（昭和17年4月1日第3種郵便物認

三菱重工業熊本航空機製作所の組立工場だった建屋。採光のため屋根はギザギザ形になっている＝熊本市の陸自健軍駐屯地

「飛龍」生んだ巨大工場

三菱重工業熊本航空機製作所

くまもと 戦後70年へ

平和を歩く ①

県内戦争遺産

2014.9.18

軍都として栄えた熊本。戦時中は飛行場や軍需工場、地下壕などが次々と造られた。来年は戦後70年。目を凝らせば、風雨に耐えた戦跡・遺構が今もひっそりとたたずむ。時を超え、〝歴史の証人〟は何を語るのか―。県内の戦争遺産をルポし、戦禍の記憶をたどる。

＝随時掲載

照明がついていないのに、手元がほの明るい。屋根がギザギザの形をしているのは、光を取り込む採光窓になっているためだった。昼間は電灯なしで十分に作業ができるのだという。

フェンスに囲まれた熊本市東区の陸上自衛隊健軍駐屯地。自衛官の案内で敷地内を歩き、工場のような建屋に入った。

小学校の体育館を八つ合わせたくらいの広さだろうか。天井も高い。屋根まで17メートルというから5階建てのビルくらいあるはずだ。

この広々とした建屋が、かつて軍需工場「三菱重工業熊本航空機製作所」の組立工場だった。空襲で屋根などは吹き飛んだが、屋台骨の鉄骨は残った。「機銃掃射の弾痕がどこかにあると聞いています」。自衛官が説明してくれるが、広すぎて見当も付かない。

「トントントントン」とリズミカルな打音が建屋内に響いている。迷彩色の船や車両が見える。いまは西部方面総監部と所属部隊が、装備の整備工場や倉庫としてこの建屋を使っているという。

三菱が戦時中に製作していたのは「飛龍」という重爆撃機だった。もし敗戦がなかったら組立工場は現存し、この大屋根の下に今でも軍用機が翼を広げているだろうか、と突拍子もない想念が浮かぶ。

唯一の痕跡はこの建屋一つになってしまったが、かつての熊本航空機製作所は一帯に多数の建物と広大な敷地を占めていた。（農孝生）

27面に続く

木曜日　熊本日日新聞　新聞定価1カ月 セット版＝朝夕刊本体価格3,204円、消費税256円(税込み3,460円)、1部売り(税込み)120円

人、ものこぞって動員

平和を歩く　県内戦争遺産

1面から続く

塀に囲まれた健軍駐屯地の約17万坪。その南側の熊本東署や第二高校など官公庁の一群。それだけではない。少し離れた熊本赤十字病院や熊本市民病院もそうだ。航空機製作所と関連施設の跡地を地図上にたどると、この軍需施設がいかに広大な土地を占めていたかが分かる。

赤十字病院の一帯には付設の飛行場があった。いまの健軍商店街は工場従業員用の寮や社宅群だった。製作所から水前寺まで、通勤者専用の鉄路「引き込み線」も敷設された。戦時中とはいえ、よくこれだけの用地と施設を確保できたものだ。

三菱重工業熊本航空機製作所の組立工場だった建屋の内部。重機などの整備工場や装備品倉庫として使用されている＝熊本市の陸自健軍駐屯地

広大な官設民営の軍需施設

△月産50機の生産体制を整えよ▽。熊本製作所は1941（昭和16）年、三菱重工への軍の生産拡充命令によって立地計画。関係者の追想を集めた『健軍三菱物語』によると、陸軍が工場や飛行場の用地を買収、三菱が社宅などの用地を確保したという。官設民営の兵器工場である。

「いかに畑ばかりだったとしても、簡単には買収できないでしょう。土地に対する〝赤紙〟のようなものがあったのではないでしょうか」。健軍駐屯地の自衛官は口にする。

■　■

△密生した竹の葉群を通過してきた春の光が、水泡のように足許に小さな斑点を揺らしていた▽

空襲から逃れ、健軍神社裏手の竹やぶにうずくまった時のことを、作家の中野孝次さんが自伝的小説『麦熟るる日に』に書いている。45年3月26日のことだ。旧制五高に在学中の中野さんは学徒動員されて熊本製作所で働いた。

一般国民に対する徴用、学徒動員、女子挺身隊…。人とものがこぞって軍務や軍需産業に動員された時代だ。

旧制中学済々黌の生徒だった松岡光夫さん(84)＝御船町＝も、製作所の旋盤でボルトやナットを作った。「詰め襟の制服もズボンも油だらけ。皮膚も油負けしてあせものようなぶつぶつができた」。夜勤時にはヒロポンが配られた。眠気覚ましの覚せい剤だった。

45年3月から空襲がひどくなると、製作所の各作業場は県内各地に分散された。松岡さんたちも上熊本の地下壕の工場に移ったが、仕事はなくなっていった。「資材不足ですよ。終戦前にはいつの間にか自宅待機になっていました」

本来は月産50機をもくろんだ製作所である。ようやく第1号機を飛行させたのは44年4月で、敗戦までに生産できたのは46機だった。工場が稼働したのは戦争末期のわずか1年余り。結局、壮大な徒労だったのではないか？

「ハッハッハッハッ」と、松岡さんの顔が苦笑いしたように見えた。「国のためだと思っていたし、やらざるを得ない時代だったですよ」

■　■

市電の健軍電停から停留所を三つぶん西へ歩くと真宗寺がある。引き取り手のない朝鮮人の遺骨がこの寺に安置されてきた。近くにいくつかの朝鮮人集落があったのだ。

熊本大の小松裕教授によると、日本は韓国併合前から朝鮮人労働者を移入していた。戦時中も出稼ぎや、労務動員で連行されてきた朝鮮人が、全国の土木工事や炭鉱などで働いた。県内では熊本製作所の飛行場整地や地下工場建設にも従事したという。

熊本市中央区の立田山墓地の一隅に、「在日大韓キリスト教会熊本教会」の小さな納骨堂がある。真宗寺から移された遺骨が眠っていると聞き、訪ねた。

趙判守、朴龍君、李奉日、崔鳳李、韓行男、申点守…。12柱の骨壷の並んだ納骨堂を包むように、残暑のせみの声が降ってくる。ここに海を渡ってきた人たちの歴史がある。骨壷の名前を一字ずつノートに書き写していると、体から汗が噴き出した。

（農孝生）

進空式

ズーム

三菱重工業熊本航空機製作所

名古屋で航空機を製作していた三菱重工が、熊本に新設した。『健軍三菱物語』によると、1942年6月に起工、44年1月に生産を開始。戦後の47年に農機具を作る三菱重工熊本機器製作所となり、49年に井関農機熊本製作所、54年に陸自駐屯地が一部に開設された。一帯は古来から「健軍」の地名で、くしくも軍需産業と自衛隊が立地した。

くまもと 戦後70年へ